

錢形平次捕物控

富籤政談

野村胡堂

青空文庫

一

「親分はいらつしやる?」

「まア、お品さんしな、しばらくねえ、さア、どうぞ——」

取次のお静は、手を取らぬばかりに、いしはら石原の利助の娘で、年増つぶりの美しいお品を招じ入れました。

「何? お品さん、それは珍しいねえ、近頃、兄哥あにきはどうなすつたんだ」

銭形の平次も、この珍客の声を聞いて、あわてて浴衣ゆかたの肌を入れながら出てきました。妙に蒸し暑い日、八朔はつさくはとうに過ぎま

したが、江戸はなかなか涼風の立つ様子もありません。

「親分、しばらく、実は少し智恵を拝借したいことがあつて伺つたんですが」

お品は座蒲団の横へ少し堅く坐りました。

まだ二十を越したばかりの、水の滴るような美しさですが、一度出戻りになつてからは、すっかり諦め切つた姿で、近頃はとかく勝れない親父の利助を援けながら、大勢の子分を指図してお上から預かつた、十手取縄を恥しめないだけの事をしているお品だつたのです。

「智恵や金はあるわけはねえが、お静、到来物の西瓜があつたら、あいは綺麗事じやないが、喉の渴いた時はよからう、お品さん

に切つて上げな」

「あれ、私はもう冷たい水で結構、お静さん構わないで下さい」
帷子かたびらの涼しい着こなし、炎天の昼下がりを、本所から神田までやつて来て、大した汗もかかない人柄がなつかします。

「ところで、頼みと言うのは何だえ、お品さん、お品さんに頼まられるのは『たぬき囃子』以来だが——」

「親分、その節はどうも——」

「いや、お礼には及ばない、私で出来ることなら、何でもやつて上げたい——。実はネお品さん、一と月ばかり前からちよいちよい私のところへ変な手紙が舞い込むんだ」

「…………」

お品は言い出しそびれて、平次の顔を眺めました。

「江戸中の何万という人が騙だまされているのを知らないか、平次の馬鹿野郎——、とネ、これが手紙の文句だ、平次の馬鹿野郎は言わなくたって判つているが、江戸中何万の人だまされているといふのが気になつてならねえ、一生懸命考あいにくえこんだが、思い当ることが一つもないばかりでなく、生憎かなことに、この節は世間が無事で、日本橋から神田へかけて、搔つ払い一つねえ始末だ。何か變つた事がねえものかと、実はこの間から考あいにくえていた矢先なんだ」

「まあ」

「そこへお品さんが飛込んで来たのは、全く鴨かもが葱ねぎを背負しょつて来

たようなものさ——、ハツハツハツ、氣を悪くしてくれちゃいけない。とにかく、何か仕事がないと、俺は退屈でかなわなくなるんだ。智恵や西瓜ですむことなら、どんな事でもやるよ、お品さん」

容易に人を縛らぬ錢形の平次が、こんな戦闘的なことを言うのは、妙な手紙に苛立いらだつて いるためでしよう。

「そうおつしやられると、極りが悪くなりますが、大変なことが出来たんです。親分、聞いて下さい、こういうわけ——」

お品の家のツイ近所に住む、お勢^{せい}という素姓の知れない年増女が、いきなり今朝飛込んで来て、

「石原の親分、ちよいと来てみて下さい、大変な事が起つたんです」

眼の色を変えて言うのです。折悪しく、利助は持病で昨夜から枕も上がらぬ有様^{ありさま}。娘のお品は、岡つ引の真似をするわけではありませんが、ともかく、行つてみると、

「お品さん、お前さんは親分より見込みが確かだつて評判だから、是非探して下さいな。私の大事の大事の、命より大事の手箱が無くなつたんだから」

命より大事の手箱と言う以上は、男の手紙とか、贋繕りとか、

独身女相応のものが入つてゐるだろうと思つて訊くと、それは大
違いで、

「中には、海雲寺様の富籤とみくじが一枚入つてゐるんです、鶴の一
千二百三十四番の札ふだで」

「外ほかには」

「外には何にもありやアしませんが、その富札とみふだが当ると千両に
なるでしょ、お品さん、どうか探し出して下さい、あれが無い
と、私は命がなくなるかも知れない」

あまりの事に、お品も面喰らいました。富籤の札が当ればこそ
千両ですが、それは何万枚に一枚の幸運を担になつた札で、あとは紙
つ屑くずの足しにもなりません。

「お勢さん、あきらめなすつたら？ そんなものを盗つたつて何にもならないし、手に戻つたところで仕様がないじやありませんか」

「いえ、あの札は、並大抵の札じやない、どうしようねえ、お品さん」

お勢は少し気が変になつたのではあるまいかと思われるようでした。

「父親うちではあの通り休んでおりますから、神田の平次親分でも頼んで来ましようか」

お品は持て余してそう言うと、

「どんでもないお品さん、私はあの平次とかいう男は大嫌いさ、

どうか呼ばないで下さい」

そういつた有様で手の付けようがありません。

なおも、逆上氣味(のぼせぎみ)のお勢をなだめて訊いてみると、泥棒は暁(あけが)方(た)入つたものらしく、お勝手口をコジ開けて、お勢の枕元から、金唐革(きんからかわ)の小さい手箱を持出し、路地で打ち割つて、その中の富札だけを持って逃げ出したというのです。

富札を買つて氣の違つた人や、自殺した人もある時代ですから、それだけなら別に大した事件でも何でもないのでですが、お勢に伴つれられて、半町ばかり先の、小綺麗なしもたやを訪ねたお品は、そこで思いも寄らぬ大変な事件に出くわしてしまつたのでした。

早い話――。

二人の美しい女、お勢とお品が、本所中の目をひきながら、同じ町内のお勢の家まで辿り着いて、抜け裏の奥の格子戸を開けると、いきなりブーンと鮮血の臭い。

「あツ」

いくらか物馴れたお品が真っ先に飛上ると、入口の四畳半に、下女のお寅とらが、紅あけに染んで倒れていたのでした。引起してみると、後ろから、鈍い重いもので、後頭部をやられ、頭の皿を打ち割られて物をも言わずに死んでしまった様子です。

すぐさま町役人にも知らせ、お品の父の利助は病中で、二三の子分が駆けつけましたが、なにぶん目先の見えるようなのは一人もありません。うつかりすると機会を失つて、親の利助の手落に

ならないものもあるまいと思つたお品は、そこから駕籠を飛ばして、神田の平次を呼び出しに来たのでした。

三

「親分、この暑いのに、本所まで行つて下さるのも大変でしょうから、一応智恵だけでも貸して下さいませんか。私や子分達にはどうにも見当のつけようがありません」

お品の折入つての頼みです。この娘の父親には、長い間白い眼で見られた平次ですが、近頃はすっかり打ち解けた仲もあり、かつ、病氣で寝ているとあつては、凝じつとしていられる平次ではあ

りません。

「それは大変、だいぶ、奥行きのありそうな話で、ここからさて利くような智恵を持つている柄じやねえ、こうしようじやないか、お品さん、これからお前さんと一緒に行つて、ともかく、その現場を一と通り見せて貰つて、何事もそれからという事にしようじやないか」

「そうして下されば、親分」

「まあ、拝まなくたつてよからう、お品さん、力になるのも、なられるのも、お互の事だ——お静、支度をしてくれ、今晚は帰らないかも知れないから、ガラツ八の野郎が来たら石原の兄哥の家へ来るようについて言つておくれ」

平次は気さくに立ち上がりました。

それから本所まで、暑い時分で、尻を端折つて駆け出すわけにも行かず、町駕籠まちかごを飛ばして、行き着いたのは、かれこれ昼頃。真つ直ぐにお勢の家まで行くと、路地の外は黒山の人だかりですが、幸か不幸か、まだ検屍けんしの役人は来ておりません。

「寄るな寄るな、見世物じやねえぞ」

町役人と、利助の子分とが堅めて野次馬を追つ払つてる中へ、二挺ちょうの駕籠は、二匹どんぱの蜻蛉のようにピタリと着きました。

「あ、お品さん、お帰んなさい」

「神田の親分も、いらっしゃいまし」

子分達は道を開けて通します。

中の様子は、先刻お品の口から聞いた通り、入口の四畳半に、血の海に浸つた下女のお寅は、二十五六の慾の深そうな肥り肉の女で、あられもない姿で引つくり返つておりますが、引起してみると、後頭部をただ一と打ち、物の見事に打ち砕かれております。「恐ろしい手練だ」

「へエ——、親分、やつぱり武家か何か、ヤツトウの心得のある者がやつたのでしょうか」

見張つていた、利助の子分が口を出します。

「いや、武家なら刀で斬るだろう。これは金槌かなづちか何かで力任せにやられたんだ。手際のいい鍛冶屋かじやか何かの仕事じやないか」と平次。

「へエ——、じや町内の鍛冶屋を しらみつぶ
虱潰 しに挙げてみましよう
か」

「待つてくれ、そんな事をされちや物笑いだ。それよりお勢さん
とやらはどこだ」

そう言う平次の声を聞いたものか、

「あら、銭形の親分さんでいらっしゃいますか、とんだお骨折で」
次の間から顔を出したのは、二十三四のちよつと凄いほど美しい女です。

「とんだ、気の毒だね」

平次はこの女に見覚えがあるような気がしましたが、どうしても思い出せません。それにしても、この器量で、この年配で本所

の奥に洒落しゃれたしもたや暮しをしているのですから、いざれ物持の後家か、誰かの囮われか何かでしよう。

「お寅とかいつたね、——この女をいつ頃から置きなすつたんだえ」

「今年の四月からですから、まだほんの四月よつきにもなりません。よく氣の付いて働く女でしたが、可哀想なことをしました」

お勢は目をしばたたいております。細面ほそおもての、華奢きやしゃな身体ですが、妙に肉感的なしなやかさがあつて何がなし、人に訴える力の強い女です。

「ところで、昨夜ゆうべ、何か盜とられなすつたそうだな」

「え、つまらないもので、極きまりが悪いくらいのものです」

「その手箱のこわれを見せて貰いましょうか」

「さア、どうぞ」

お勢は用意しておいたように、素直に小さい手箱を持つて来て見せました。

「これは立派なものだ」

眞物の金唐革ほんもの きんからかわで張りつめた、見事な手箱ですが、たつた一撃で打ち割られて、中の木地きじがメチャメチャに碎けております。

「フーム」

平次は引っくり返して調べながら、一人で唸うなつております。

「どうなさいました、親分」

「なアに何でもないが、——これだけの物をたつた一と打ちで碎

くのは、どんな人間だろうと思つただけの話さ。ところで、盜られた品は?」

「それがつまらない物なんです」

「富札とか言つたね」

「え」

「外ほかにはないね」

「外にお金が少し」

「へエ——、お品さんからはそんな事を聞かなかつたようだが」

「うつかりしてました、後で気が付くと小判と小粒を交ぜて、十五両ばかり入つておりました」

お勢は事もなげです。

「十五両なら大金のうちだ、してみると、金が目当てだつたんだね」

「そうでしようか」

「富の番号は」

「鶴の一千二百三十五番と思ひましたが——」

「え？ もう一度」

「鶴の一千二百三十五番でござります」

「間違ひはないだろうな」

「間違ひはございません」

平次が後ろを振り向くと、お品の眼とハタと逢いました。

お品に聞いた番号は、確かに鶴の一千二百三十四、この女の言

葉とは、たつた一つ違つております。外の事なら違つても大した事はありませんが、富札の番号は、一つ違えば、どんな事になるかもわからないのです。

お品の眼は、何やら雄弁に語りますが、平次は、何を考えたか、二つ三つまたきしてそれを封じたまま、

「海雲寺の富突きは明日だ、その札だね」

誰にともなく、こう言います。

「……」

ちょうどそこへ、町役人に案内されて、検屍の役人が乗り込んで来ました。

それを合図のように、女だてらにと思われたくなかつたのでし

よう、お品は人混みの中へ姿を隠してしまいました。

四

お寅の里は葛西^{かさい}の百姓、死体はその日のうちに、親が来て引取りましたが、下手人の見当はまるつきり付きました。

お勢^{まき}というのは、山の手辺の物持の後家で、継子^{ままでこ}と折合が悪くて、本所へ独り暮らしをしているということでしたが、近所の噂^{うわさ}では、夜な夜な男が忍んで来ると言つております。たぶん近所の誰かが、世話を焼いているのでしよう。いろいろ手を尽して調べましたが、本人が口を緘^{つぐ}んで言わないのと、肝腎^{かんじん}の下女が死んで

しまつたので、突き止める手蔓てづるもありません。その晩は葛西のお寅の親元、お勢の本家、と手を尽して探しましたが、何としても手掛りらしいものが掴めません。たぶん、流しの強盗おしこみが、前の晩入つて収入みいりが少なかつたために、翌あくる日は下女一人のところを狙つて、また入つたのであろう、——利助の子分も、近所の衆も、そういうつたことで片付けてしまつたものです。

「そんなはずはない」

平次は一人思い悩みました。

引返して、もう一度、お勢の家を訪ねたのは、その晩の亥刻よ
(十時)頃。

「まあ、親分、よくいらつしやいました。淋しくて、淋しくて私

はもうどうしようかと思つていたところでした」

お勢は手を取らぬばかりに引られます。

「いや、もうそうしてもいられない」

血潮に汚された畳を剥^はがして、薄縁^{うすべり}を敷いた四畳半の上がり框^{かまち}に腰を下ろして、そう言いながらも平次は、腰の煙草入を抜きました。

「そうおっしゃらずに親分さん——、ちよいとでも入つて下さいませんか、御町内には馴染はなし、麹町^{こうじまち}の本家の者は、不人情で寄り付きやしませんし、お寅が殺されたり、強盗^{おしこみ}が入つたりした後へ、私はたつた一人で、死ぬほど恐ろしい思いをしているんです」

お勢の言葉は満更嘘でもなかつたでしょ、華奢な胸を抱いて、こう言う唇が、少し蒼ざめます。

「それはお氣の毒だね、泊つて貰う人でも頼んだらどうだ」

「それが親分さん、金すくでも腕すくでも、人殺しのあつた後などへ泊つてくれ手はありやしません。こんな時は身内の者が欲しいと思いますよ」

平次はいつの間にやら草履を脱がせられて、次の間の長火鉢の前まで引っ張り込まれておりました。女一人で、このような夜を過そうという、美しいお勢に同情する気になつたのでしょう。

やがて、銅壺へ一本、ざつと湯搔いて、

「さア、親分、まア一つ召上がれな」

飲まない先から、膝^{ひざ}を崩したお勢は、斜^{はす}つかけにこう、小さい猪口^{ちよく}を差します。

「そんなにしちゃいられない」

「まあ、固いことをおつしやらずに、少しぐらいはいいじやありませんか」

「じゃ、ほんの一と口」

平次はどうどう猪口^{ひよ}を舐^なめてしまいました。

「ね、親分さん、私本当に困つてしまつたんです」

「それは困るだろう」

「いえ、親分でも泊つて下さらなきやア、とてもこの家で一と晩過せそうもございません、ね、親分」

「冗談言っちゃいけない、お勢さん、お前さんは、それにしちゃ少し綺麗すぎるよ」

「まあ、親分、程のいいことを」

「もうたくさん、俺はあまりいかないんだが、お勢さんの勧め上手で、とうとうこんなに酔つてしまつたよ。どりや、もう一と廻り」

平次は立上がりかけました。

「ね、親分、お願ひがあるんですけど――」

お勢は言おうか言うまいかといった調子で、しばらくためらいましたが、

「本当に泊つて頂けませんかしら」

ヒラリと、飛付くと平次の肩へ。

「あつ」

平次は、この美しい女郎蜘蛛じよろうぐもを引離すのに、いい加減骨を折らされてしましました。

「随分、情け知らずの親分ねえ、こんなに女へ恥を搔かせていいものでしようか」

「お勢さん、冗談を言つちやいけない。お前さんは、私が大嫌いじやなかつたかね」

「あら、誰がそんな事を申しました」

「まあいい、それじや用心するがいいぜ」

平次は漸ようやく上がり框から滑り落すべると、サツと格子の外へ飛び出

してしました。

「あれ親分、待つて下さい」

赤い、焰ほのおのような女は路地の前まで追つ駆けて来ました。

「弱つたなア、お勢さん」

「いえ、もう決して無理は申しません。その代りに、一生のお願い、私を横網よこあみまで送つては下さいませんか」

女は平次の袖に縋すがり付いて息をはずませます。

「横網へ行つてどうするんだ」

「女一人で、どう我慢しても、この家では一と晩とは過されません。横網の指物師で藤次郎とうじろうというのは、私の知合いでですから、あすここまで送つては下さいませんか」

「それくらいの事なら出来るだろう」

「まあ、有難い、それじやちよいと待つて下さいまし。火の用心をして戸締りをして来ますから」

お勢は引返しましたが、間もなく出て来ると、平次と肩を並べて、月のない街を、横綱の方へ——妙にそわそわしながら辿りました。

「ここでございますよ、親分」

とある格子、深々と締切つた前に立つて、お勢は平次の耳に囁きささやたゞきました。

「それじや、俺は帰ろう」

「済みませんが親分、ちよいと声を掛けて下さいませんか、藤次

郎親方とは長い間の知合いで、氣まずい事があつて、近頃は往来もいたしません、私がいきなり顔を出したんでは、また何とか厭なことを申しましよう。お願いでございます、藤次郎に否応言わせないように、ほんのしばらく親分のお顔を拝借さして頂けませんか」

お勢はそう言いながら、なよなよと平次の肩へ、くずおれた紫陽花のよう凭れかかるのでした。

平次が点頭いたことは言うまでもありません。

間もなく、お勢の叩く拳につれて、格子は内から開いて、ヌツと出たのは、醜い男の顔と、赤い手燭でした。駆け寄つて囁くお勢に、何やら苦い顔を見せておりましたが、お勢が身を避けて、

手燭の灯^ひを平次の顔一パイに浴びせると、男はギョツとした様子で、物も言わずにお勢を引れます。

「有難うございました、親分さん」

お勢は格子を潜りながら、こちらを向いて、少し大袈裟^{おおげさ}に礼を言いました。その後ろに立つた藤次郎は、妙にギゴチない表情で、凝^{じつ}と女の一挙一動を見詰めております。

五

翌^{あく}る日。

「お品さん、ガラツ八はどうとう来ませんね」

「どうなすつたんでしょう」

夜つびて活動した平次は、朝のうちに利助のところを訪ねましたが、昨夜から待つた、好助手のガラツ八はとうとう姿を見せません。

「何かに引っかかっているんでしょう、仕様のない奴だ」

「お手伝いなら、家の若い者じやどうでしょう、二三人ゴロゴロしていますが」

「結構すぎるぐらいですよ、お品さん、大の男の、あまりはしつ
こそうなのは、かえつて相手に用心させるから、私はガラツ八ぐ
らいな頓間とんまな顔をしたのが欲しいんだ」

「まあ」

「お品さんなら、女だけに相手も気を許すだろう、思い切つて出かけてみる気はないかね」

「私でもお役に立つことなら、何でも遠慮なしにおっしゃつて下さい」

「それは有難い、お品さんは生れ付き目先が見えるから、男だつたら立派な御用聞だ」

「まア」

それでも大急ぎで支度をして、二人が立ち出でたのは朝の巳刻（十時）過ぎ。言葉少なに、平次が案内したのは、海雲寺の境内、その日正午の刻に富突きを興行しようという、物凄い場所でした。徳川時代の富籤とみくじというものは、どんなに盛んなものであつた

か、これは書いていると際限もない事ですが、とにかく、幾度も幕令を以て禁止されながら、これが明治の初年まで続いて、あらゆる悲喜劇を生み、あらゆる害毒を流したことは言うまでもありません。

元禄、特に 享保 以後はいろいろ取締りの方法も講ぜられ、大檢使小檢使などいう大名以上の監督者まで付いて、比較的公平なものになりましたが、それでも、役人の目をかすめて、影富などいうものが行われました。

まして平次が盛んだつた頃の富突きというものは、随分怪しげなもので、谷中の感応寺（今の天王寺）、湯島天神、目黒不動尊などで興行した、いわゆる天下の三富といった、格式のある

のは別として、市中に催された富興行のうちには、随分いかがわしいものも多かったと言われております。

元来は、社寺の修繕新築の寄進などに行われたものですが、後にはすつかり射^{しゃこう}倖機関のようになつてしまつて、多い時には江戸中に二十五箇所の富があつたというくらいです。一番当りは千両から、少なくも百両二百両というのですから、その当時の相場にすると一と身上を起すわけで、江戸中の人間を夢中にさしたのも無理のことです。

その日、海雲寺に集まつたのは、五六千人、広い境内も身動きもならぬ有様^{ありさま}。本堂正面には青竹の逞しい手摺^{たくま}_{てすり}を組んで盛装の僧が十数人、朝から般若^{はんにやきよ}経を上げております。その頃はまだ、

大検使小検使などということはありませんが、寺社奉行からは、係の者が二人出張、町役人、寺の世話人、檀家総代などと、あさがみ麻ま袴しもに威儀を正して居流れます。

香の煙こう、お経の合唱、梵鐘ぼんしょうの伴奏に、次第に時刻がたつと庭一杯に集まつた群衆は、真昼の暑さも忘れて、虫のように蠢うごめきます。一つ当れば、五寸二分に一寸五分の鳥の子の富札が一千両になるのですから、これは緊張しない方がどうかしているでしょ。千両というと、小判が千枚、その頃の良質の小判は一枚四匁もんめで、今（昭和十年頃）の相場にすると六十円ぐらいに当ります。物の安かつた頃ですから、その通用価値は十万円にも相当するでしょう。千両分限ミリオネヤードという言葉が、今の百万長者と同じ意味に用い

られた時代の事です。

やがて正午の刻になると、本堂正面に据えた、縦二尺、横三尺の白木の箱、数千枚の富札が一パイに入つたのへ、二重蓋をして、大海老錠をおろし、役人世話人立合いの上で、ガラガラガラと揺り動かし、中の札を丁寧にかかり混ぜます。

それが済むと、寺の小坊主、年の頃十二三ばかりのが、墨染めの腰衣を着け、手に長柄の錐を持って現われ、世話人の手で、厳重に目隠しをされ、札箱の後ろへ立たされました。

その後ろには、寺社奉行の検使をはじめ、札番書留役、札番読上役などが控え、本堂の奥では、引続き読経の声、鐘の音に和して、これが何とも言えない悲愴陰惨なものだつたそうです。

やがて、突き役の雛僧^{ひなそう}は、錐を上げて、二重蓋の真ん中にあ
る穴に突き入れました。第一番に突き上げたのは、当日の一番当
り千両の福運のある札ですから、錐は奈落の底から、天上まで引
上げられるような心持。境内に充ち溢れた数千の群衆は、しわぶ
き一つする者もありません。

「一番札、鶴の一千二百三十四番」

読上役がそれを高々と読み上げると、

「ワーッ」

境内はさながら大波の寄せたような有様。中には、卒倒する者
も、踏み潰^{ふつぶ}されるものもあるという騒ぎです。

六

「一番当りの札を持つた方はないか」

「鶴の一千二百三十四番はないか」

境内の人気がだいぶ散つた頃まで、名乗つて出ないのはどうした
事でしよう。

「千両の当りは鶴の一千二百三十四番だぞ」

呼ぶ声に応じて、

「私でござります」

水のごとく冷静に、疎^{まば}らになつた、人垣を分けて、書留役の前
へ近づいたものがあります。

「なんだ、お前さんか、早く言えばいいのに」

見ると、二十三四の水の滴りそうな女。

「あまり混亂こみかたがひどくて、前へ出られやしません」

物驚きをする様子もありません。

「所とお名前は——、ええと御承知だろうが三日以内に受取ると、定めの寄付の外に一割の手数を申受ける、お判りだろうな」

「よく判つております。が、お金はなるべく急いで御下げ渡し下さいまし、私の所は、石原の孫右衛門店まごえもんだな、勢せいと申して、後家でござります」

「よろしい、七百両だけ、明日、遅くも明後日はお渡しする、受取りに来なさるがいい」

書留役は、この女の落着き払つた様子に舌を巻いて、少し呆気けにとられた形です。

お勢は一向こだわる風もなく、そのまま引下がつて、両袖や文字違いなどいう、百両から五十両、三十両の福運にありついた人達の喜びを尻目に、静かに山門の外へ引返しました。

「ちよいと、お勢さん」

「あら、お品さん」

「お目出とう、千両当つたんですつてねえ」

「え」

お勢は妙に揃つたいような顔をして足を急がせました。

「でも、お前さん、一千二百三十四番の札は盗まれたんじやあり

ません?」

「いいえ、盗まれたのは一千二百三十五番だと言つたじやあります
せんか」

「そう」

お品はその上追及しませんでした。いや、追及したところで、
何の足しにもならないことをよく知つていたのです。

一千二百三十四番を当り籤くじとすると、一千二百三十五番は両袖
で、百両の花籤はなくじが付いているはずです。お勢の言うことが本当
だとすれば、昨日きのう、お勢のところから富札を盗んだ者が、その花
籤の百両が欲しさに、名乗つて出ていないとは限らないわけです。
お品は引返して書留役に聞くと、

「一千二百三十五番の花籠は売れ残つて帰つて来ましたよ、当り
はありません」

何ということでしょう、お品は呆然ぼうぜんとして、しばらくは書留
役の顔を眺めておりました。

七

「親分、これは一体どうしたわけでしょう、私には少しむつかし
くなりましたが——」

頭の良いお品も、すっかり兜かぶとを脱いで、間もなく帰つて來た平
次に報告しました。

「それは面白い、お品さん、大手柄だ。その花籠が当りがなかつたという事を聞いてくれたんで、俺は何もかも判つたような気がする」

平次の話はあまりに予想外でしたが、その喜び勇む色に掛引があろうとも思われません。

「親分、それは本当でしようか」

お品の美しい眼は、少し臆病にまたたきます。

「あの富籠は大おおかた騙だまりなんだよ。実は今まで俺はそれを見張つていたんだが、どんな手品を使つたか、どうしても判らなかつたんだ。お品さん、お前のお蔭で解つたようなものだ。お寺を一つ潰つぶすのは気の毒だが、今までも幾十遍となくやつて來たことだし、

放つておくとこれからもやるだろう。何万という人を盲目にして、
太い奴らだ。勘弁しておくわけには行くめえ」

「えツ」

千両の富籤が騙り？ そんな事があるでしようか、お品はあまりの事に二の句がつげません。

「お品さん行つてみよう、一刻の後れは千里の後れだ、細工を隠す隙のないうちに踏込んでみよう」

「…………」

一気に飛出す平次。お品ももう、女だてらの遠慮などをしてはいられません。

二人が海雲寺に着いた時は、境内の人人はすっかり散り、寺社奉

行の検使は帰りましたが、町役人や、役僧や、世話人はそのまま居残つて、跡始末をしている最中でした。

「御免よ」

「あ、銭形の親分」

世話人達は、何がなしそうとした様子です。

「すまねえが、その富箱をちょっと見せてくれないか」

「へエ——

「その箱に腑ふに落ちねえことがあるんだ、ちょいと見せて貰おう

か

平次は気が立つていたせいもあるでしょう、ツイ日頃にもなく

威猛いたけだか高になりました。

「親分——いやさ、平次親分」

「何だい」

世話人の一人、原庭の顔役で相模屋の綱吉といふ好い男、本堂の青竹の手摺から見下ろすように平次に突つかかって来ました。麻袴あさがみしもは着ておりますが、拳骨げんこつを懷ふところへねじ込んでイザといえба、これをパツと脱ぎそな形になります。

「富は寺社奉行がお係りだ。町方の岡つ引が、何の因縁いんねんがあつて、そんな大きな口を利くんだ、帰れ帰れ」

「何だとツ」

「出直して来いってんだよ、錢形が何で工、間抜けな面じやねえか」

「……」

恐ろしい毒舌を浴びて、平次もサツと顔色を変えましたが、一い
ちごんはんく 言半句も返しようがありません。

「よしッ、帰つてやるが、寺社奉行の檢使の方が、まだ遠くは行
くめえ、その辺からお伴つれ申して来るが、それまでその富箱へ手
を掛けちゃならねえぞ、——お品さん、しばらく見張ついて貰
おう」

平次は言い捨てて、サツと帰ろうとすると、

「あ、待つておくんなさい、錢形の親分、相模屋が少し酔つてい
るから、とんだ粗相をしました、どうぞ機嫌を直して、何事も大
目に見てやつて下さい」

と、もう一人の世話人、足袋跣足たびはだしのまま飛降りると、平次の袖へゾロリと、一と包の小判を握らせます。

「何を言やがる。こんな事をする以上は、いよいよ臭いに極きまつたようなものだ。お品さん後を頼むぞ」

平次は袖の小判を取つて本堂に叩き付けると、後をも見ずに両国橋の方へ――。

二人の検使は、富籤に不審があるという町方御用聞の申立てに、渋々ながら海雲寺まで引返しました。

海雲寺の本堂は、上を下への騒ぎ、何べんか富の箱を片付けようとしたが、その度ごとに、お品と、利助の子分に妨げられて、それもならず、何がなしに上ずつた騒ぎの中に、時を過して

しまつたのです。

「鶴の一千二百三十四番が一番札に当るということは前々から解つていたのに相違ありません。何万人の目を盗んで、太い奴らでございます。後のため、世上せじようへの示し、箱の仕掛けをよく御覽下さいまし」

そう言つて平次、今度は二人の検使と一緒に本堂に押上おほあがりました。咄嗟とっさの間に気の付いたのは、二重蓋の下に、観世縫かんぜよりで鶴の一千二百三十四番の札を平らに吊り、それを錐きりで突き下げる方法ですが、見たところ箱の蓋には、観世縫を仕掛けた跡もなく、真新しい札にも何の異状もありません。

「どうした、何か不審の点が見付かつたか」

と検使。

「へエ——」

平次は気が気じやありませんでした。

次に考えられることは、錐に磁石を仕掛け、当り札に鉄片を付けておくことですが、これも、その札が深く隠れている時は無効で、その上、見たところ、長柄ながえの錐にはどんな仕掛もありません。平次はすっかり弱つてしましました。

でなければ、読上役が手品を使つたか、——いや、そんな事はとても考えられません。役人や群衆の何万の目が見張つている中で、そんな器用なことが出来るはずはないのです。

「平次、いい加減にせい。せつかく売り込んだお前の箱はくが剥はげる

ぞ」

相模屋綱吉が、後ろで意地の悪い目を走らせると、平次は煮えくり返るような思いです。もし、このまま引下がるような事になつたら、わざわざ引返させた検使の手前、自分は腹でも切らなければ納まりません。

「この箱を一日私に借しては頂けませんか」

とうとう弱音を吐いた平次。

「馬鹿な事を申せ」

少し焦じりじり々しているらしい検使に、たつた一と言で止めを刺されてしまいました。

「…………」

平次は黙つて目をつぶりました。必死の目先に、チラリと映るのは、お品の顔、お勢の顔、お寅の死顔、それから、あの藤次郎とかいう指物師の醜い顔です。

何心なく眼を開くと、本堂の隅、物の蔭に、その醜い顔が居るではありませんか。

——あいつは指物師だ、いや、——あの指物師が仲間だつたのだ——

平次は豁然^{かつぜん}としました。二重蓋の中を見ると、容易に見分けは付きませんが、中の札の木目に、何やら異状があるようです。その辺にある富籤を一枚拾つて当てるに、その変つた木目の部分にちょうどピタリとはまります。

「これだツ」

平次の頭には、電光のような靈感が湧きました。箱の外壁をグルリと撫^なで廻すと、所々に打つた厳しい鉗^{いかめ}の一つが、どうやら心持動くではありませんか。

それをグイと引くと、二重蓋の一部の木目へ、一寸五分に幅二分ばかりの穴があいて、ちょうど富札を一枚そつくり呑むのです。念のために札を押し入れて、鉗を戻すと、札はスルリと飛出して、ちょうど穴一杯に塞ぐ形になるのでした。世話人が鉗を動かして、これだけの細工をした上から、長柄の錐で突いたところで、どうして立会いの役人や、境内の群衆に判るでしょう。

「野郎ツ、くたばつてしまえツ」

見破られたと知つて、一刀を引抜いて斬つてかかつた綱吉は、

「えツ」

平次の投ほうつた富札に、もろくも額を割られて尻餅をつきました。

「御用ツ、神妙にせい」

利助の子分は、お品の指図を待つまでもなく、疾風しつぶうのごとく本堂に乱入します。間もなく、綱吉も役僧も藤次郎も一網打尽いちもうだいん、檢使の役人のために数珠じゅずつなぎにされてしまいました。

*

「親分、有難うございました、お蔭で、いかさま富を見露みあらわして

戴いて、どんなに人助けになつたかわかりません」

お品は事がおわつてから、つくづくこう平次に言いました。

「お品さん半分はお前さんの手柄だよ」

「冗談でしよう親分、それよりどうして藤次郎に目を付けなすつたんです。後学のためにそれを教えて下さい」

「何でもないよ、箱は名人の指物師でなければ出来ないし、お勢

が藤次郎の家へ行つたことから思い付いたんだ。最初から言えば、

綱吉は役僧と共謀ぐるになつて、何か弱い尻のある藤次郎にからくり

の箱を拵こしらえさして、長い間いかさま富を興行していたんだ。藤次

郎は癪しゃくにさわつてたまらないが、自分にも弱いところがあるので、

明らかまにはゆすることも出来ず、折を狙つていると、ちょうど、

綱吉が妾のめかけお勢に千両の富の札を預けた事を知り、それを盗んで鼻をあかそうとしたんだよ。もつともそのためには下女のお寅を手なずけてかかつたが、お寅がうるさい事を言うもんで、二度目に行つた時、手前ものの玄翁げんのうで一と打ちにやつつけてしまつたんだ』

「お勢はそれを知つていたでしようか」

「知つているとも。だから、俺をだしに使つて藤次郎の家へ押かけ、藤次郎を脅かして富の札を捲き上げたんだ、いや恐ろしい女だな。そして翌あく日ノコノコ千両受取りに出かけたんだから一通りじやない」

「……」

「もつともあの女は七人花嫁をさらつた丹頂たんちょうのお鶴つるの妹だと
いうことだ。それくらいの事はするだろうよ。惜しい事に逃がし
てしまつたが、いづれは御用になる女には相違ない、へこの間中
から江戸中の何万の人が騙だまされているのを知らないか、平次の馬
鹿野郎しかのら』といふ手紙を俺へくれたのは、外ならぬお勢さ、ハツハ
ツハツ」

平次は事もなげにそう言つております。

海雲寺の役僧、綱吉をはじめ世話人一同、藤次郎、それぞれ処
刑され、それから江戸の富籤の取締りはやかましくなりましたが、
お勢はそれつきり姿を隠してしまいました。

この女の強かさは、最初千両当るに極きまつた札を紛失してあわて
したた

たのを、お寅たちま。が殺されると忽ち用心深く冷静になり、富籤の番号たちま。を変えて誤魔化ごまかしたり、盜とられもせぬ金を盗られたと言つて平次の注意を外へそらせようとした事でもよくわかります。

お勢がこの次に顔を出す時は、平次もまた一と骨折らせられる時でしょう。

それはいつの事かわかりません。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（六）結納の行方」嶋中文庫、嶋中書店
2004（平成16）年10月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物百話」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「ホール讀物」文藝春秋社

1932（昭和7）年9月号

※表題は底本では、「富籤『とみくじ』政談」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2016年9月9日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

富籤政談

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>